

【小・中学校教育の指導の重点】
重点1 感性豊かな心とたくましい心身の育成
重点2 確かな学力の育成
重点3 家庭・地域と連携・協働した
誰一人取り残さない学校づくりの推進

7月号

教育班だより

※気仙沼湾横断橋(かなえおおはし)

気仙沼教育事務所HP <https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/mskyoz/>

7月、うみねこの子育てはクライマックスの「巣立ち」を迎えます。
巣の周辺では、若鳥たちが大空へ飛び立とうと、何度も羽ばたきの練習を繰り返しています。親鳥は手出しをせず、少し離れた場所からその挑戦をじっと「見守り」ます。過保護にならず、子供の自立する力を信じて待つその姿勢は、まさに現代の教育にも通じる重要なスタンスです。果敢に風を掴もうとするうみねこの姿は、子供たちの主体性や一歩踏み出す勇気を育むことの大切さを、私たちに教えてくれます。

副参事（指導主事） 森 美紀子

今月の鳥「うみねこ」



お知らせ 【7月・8月の教育事務所主催の行事、研修会等】

日にち	研修事業	開催場所
7/21（火）	スクールカウンセラー研修会（9：30～）	気仙沼合同庁舎
7/21（火）～24（金）	算数チャレンジ大会（算チャレ）2026予選	各学校
7/28（火）	5年経験者研修 教育事務所研修①（9：30～）	気仙沼合同庁舎
8/4（火）	初任者研修（2年目）教育事務所研修②（9：30～）	気仙沼合同庁舎
8/20（木）	中堅教諭等資質向上研修 実践研修②（9：00～）	気仙沼合同庁舎
8/31（月）	小・中学校教頭会議②（9：00～）	気仙沼合同庁舎

5/20（水） 初任者研修（2年目）教育事務所研修①

研修会では、2年目の教員としての自覚を深め、具体的な課題研究の内容把握と今年度の目標設定、さらには授業改善に向けた協議が熱心に行われました。また、先輩教員からの「話題提供」として、気仙沼市立面瀬小学校の飛川葵依教諭、及び気仙沼市立新月中学校の叶内志帆教諭から、昨年度の課題研究の紹介や、研究を進める上での具体的なポイントについて、お話いただきました。参加者からは、以下のような感想が寄せられました。

- 1年目の実践を客観的に見つめ直すことで自分の課題が明確になった。2年目は児童生徒の主体性を引き出す授業づくりに挑戦したい。
- 同期の先生方と悩みを共有し、具体的な解決策を話し合えたことで、明日からの実践への意欲が更に高まった。
- 指導主事の先生や同期の先生から様々な視点で助言をもらい、教材研究の深め方や生徒指導の在り方について改めて見直す大変良い機会となった。
- 指導案検討を通して、単元の見通しを持たせる工夫や、ICTの効果的な活用方法について新たな気付きを得ることができた。

これらの感想から、話題提供や協議を通した今回の研修が、教員としての更なるステップアップにつながる有意義な時間となったことがうかがえました。今後も研修での学びを、各学校での教育実践に生かしていくことを期待しています。

※課題研究について、以下のスライドの内容をお話ししました。

講義の振り返り

- 研究主題と副題に備える **3つの要素**
- 研究主題の **目的**と **方法**の間に **ズレ**が生じていないか
- **文言の定義**をして、ねらいを達成した子供の具体的な姿をイメージできているか
- 「授業づくりの視点」の手立てが有効であったかを見取るための、**検証計画**まで考えているか

05/20/2026 32

6/2（火） 初任者研修（1年目）教育事務所研修①

研修会では、「学級づくり・人間関係づくり」をテーマに講義と演習を行いました。構成的グループエンカウンターを体験した後、学級経営を織物に例えた「縦系（ルールや規範）」と「横系（心の通い合い）」の理論（野中・横藤、2014）について理解を深めました。また、先輩教員である気仙沼市立九条小学校の須藤輝教諭、南三陸町立志津川中学校の佐藤瑠佳教諭から、「教師1年目を振り返って」をテーマに話題をご提供いただきました。

参加者からは、以下のような感想が寄せられました。

- 班長講話の「汝、何のためにそこにありや。」という言葉が心に残った。いつ問われてもいいように1日の1%を未来に投資し、教員として自覚ある生活者でいたいと強く思った。
- 学級づくりを織物に例えた「縦系と横系」の話が大変腑に落ちた。これまで横系ばかりを意識していたので、ルールや規範といった縦系もしっかり張っていききたい。
- 教師自身の率先垂範が子供たちとの信頼関係を築く基盤になるという言葉にハッとさせられた。まずは自分自身の行動から見直していききたい。
- 良い授業をつくるためには、基盤となる人間関係（聞き合える関係）が不可欠だと学んだ。日々の声掛けを大切にしていきたい。

これらの感想から、今回の研修が、各学級の実態に応じた学級経営を見つめ直す有意義な時間となったことがうかがえます。今後も研修で得た学びを、それぞれの勤務校での教育実践に生かしてほしいと願っています。



6/10（水） 管内研究主任研修会



本研修のコアメッセージ

一本の線でつながっている「研究の概要」にするために

- ☑ 「取り組みたい手立てから逆算して実態を書くのではなく、目の前の子供の事実に基づく『課題分析』は、『なぜ今年、この研究をするのか』という確固たる根拠になる。」 ➡ 「先生方が、研究を理解し、納得して取り組むことにつながる」

- ☑ 「なぜ、この研究をするのか」その理由が明確に書かれているか。そして、目の前の子供の課題を解決できる手立てが組まれているか。

05/22/2025

15

【核心】なぜ今、「事実ファースト（帰納的）」の視点研究なのか

「複数の視点（カメラ）」で、子供の事実を録る

- 研究主任が示す「視点（見るべきポイント）」とは、授業に配置する複数のカメラです。このカメラで客観的な事実を集めます。
- 「手立てAに対して、つまづいている児童Xがどう反応したか」
- 「グループワークBで、児童Yがどう見方・考え方を働かせたか」など

事実の積み重ねが、研究を検証する

- 「1回の授業、1人の姿」だけで判断するのではなく、複数の授業、複数の視点が捉えた「子供の姿容の事実」をたくさん集めて重ね合わせることで、「あ、やはりこの手立ては有効だ（ルール・傾向の発見）」と、帰納的に研究の成果を導き出すことができます。

➡ だからこそ、今の現場ではこの方法が主流であり、当たり前になっています。

05/22/2025

20

研修会では、「校内研究（主題・副題から視点まで）」を授業に具体化するために「先生方の主体的な参加を促すために」をテーマに、講義と演習を行いました。校内研究全体計画を用いた演習を通して、実態把握から手立てまでの一貫性の重要性について理解を深めました。また、「仮説研究（演繹的）」と、子供の姿を複数の視点で捉える「視点研究（帰納的）」との違いについても学びました。また、研修の中盤には、気仙沼市立大谷小学校の佐藤祐司教諭より、「校内研究と日々の授業づくりをつなぐ工夫」と題した話題提供をいただきました。自校の実践に基づいた具体的な事例紹介は、その後の「校内研究と日々の授業づくりをつなげるために」をテーマとした研究協議の大きなヒントとなりました。

参加者からは、以下のような感想が寄せられました。

- 実態把握に基づかない手立てがいかに空虚になるか、演習を通して痛感した。自校の研究計画の一貫性を改めて見直したい。
- 「視点研究」における帰納的なアプローチの話が腑に落ちた。複数の視点（カメラ）で子供の事実を捉える意識を校内で共有したい。
- 事後検討会を「主観」から「客観（子供の事実）」ベースに変えるという視点は、先生方を巻き込む上で非常に有効だと感じた。

アンケートからは、従来の枠組みに捉われず、自校の研究計画を見直そうとする前向きな姿勢が多く見受けられました。研修での気づきが、各校の実態に応じた実践的で効果的な研究推進の原動力となることを願っています。